



# 家づくり に対する思い



高校2年のある早朝、「おい、和樹行くぞ!」と父に起こされトラックに乗せられました。トラックの荷台は資材がいっぱい積まれているのでどこに行くのか不安な気持ちでいっぱいでした。到着したところは建築現場でした。

「和樹、今日は家の骨組みが完成する上棟の日だ、よく見ておけ。」

現場は「コンコンコン」という金づちの大きな音と、木のいい香りが広がっていました。木材がたくさん積み重ねてあり、2人の鳶さんが木をクレーンで一本一本吊り上げて移動していました。それから「セーの、コンッ。セーの、コンッ。」と息を合わせて木材の端と端を叩き、組み合わせていました。

「うわぁ、かっこいいなぁ、こんな風に家が建つんだ…」

最後は、鳶と大工とクレーンの三者が息を合わせて棟木と呼ばれる家の一番高いところに材木を納めて上棟が完了しました。

お施主様が父に「棟梁ありがとうね。」と言いました。

父は満面の笑みを浮かべていました。

「和樹、登ってみるか。」父はそう言うので、

その家のてっぺんに連れて行ってくれました。

「ほら、いい景色だろう。遠くの方まで見渡せるぞ。」

上棟の時のこの景色は特別だぞ。」

「うわぁ、すごい!」

そこで父が

「大工っていうのは『大いに工夫する』って仕事なんだよ。木には一本一本クセがある。そのクセを読み取って加工し、適切な場所に使用する。何十年先も仕上がりがキレイであるために見えなくなる下地作りの段階でも、木材にひと手間ふた手間かけてやる。それは、お客様にいつまでも安全で安心に暮らしてもらうために。」と教えてくれました。

私は父のように大いに工夫する大工になりたいと思い、その後5年の修行を経て清水台工務店で父とともに大工仕事をやるようになりました。

父は、大工として50年の長きにわたり地域の皆様からお仕事を載せて私や妹たちも育ててくれました。私も父の「大工は大いに工夫する」を心に刻み

地域に必要とされる工務店になれるよう精進してまいります。



父の一本締めでお辞儀する私

大学3年の時(5年の修行に出る2年前)父と上棟式に参加した私です。戸窓いつ見よう見まねで乗り切っています…